

古墳時代以外の内山遺跡

内山遺跡では古墳時代以外の遺構・遺物も見つかりました。ここでその成果を簡単に紹介いたします。

縄文時代～弥生時代

先史時代の遺物を確認しています。縄文時代晩期～弥生時代の土器のほか、石器が出土しました。土器は、深鉢の胴部片と底部片が出土しています。石器は、石鏃、打製石斧、礫器や、その素材や製作上の剥片石核類などが確認されています。石鏃などはチャート石材を主体としている一方、打製石斧などは矢作川岸で採取できる安山岩（根羽石）で作られています。石器は、古墳①および古墳②の墳丘のあった場所での出土が多く、かつてあった墳丘に覆われて、良好に残ったものと考えられます。



内山遺跡出土 土器と石器



調査区南東部の平面図（北東より）

江戸時代以降

調査区の北側は、江戸時代後半以降、宅地が所在していたことが、明治時代の地籍図などで見ることが出来ます。灰褐色の包含層が一面に広がっており、中からは陶磁器片のほか、銅銭やキセルに加えて、鉄滓と言われる遺物がまとまって出土しました。鉄滓は鍛冶を行った際に出るクズです。ここでは、農具などを整える、野鍛冶などをした際にできたものと考えられます。一方、調査区南東側は、土地を大きく崩して平坦な面が作られていました。居住した痕跡がないため、祠などがあったのかもしれない。いま紹介した場所以外では、全面に畑地が営まれていました。畑地の脇の斜面には、巨礫なども集められた土の高まりが見つかっています。耕作の際に退けられたものが集められた場所なのかもしれません。陶磁器片のほか、銅銭も出土しました。（川添和暁）

内山遺跡発掘通信

No. 1
令和8年
3月号

令和七年度発掘調査が終了しました

一月から開始しました、内山遺跡の令和七年度の調査は、三月十三日に無事終了いたしました。調査に際しては、近隣の皆さま、および関係の皆さまからは、埋蔵文化財調査へのご理解と温かいご配慮を頂くことができました。この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回の調査の主目的は「消えた古墳群を探せ」というものでした。調査の結果、今年度は三基の古墳の所在を確認することができ、古墳内外から須恵器や玉など、多くの遺物が出土し、古墳が存在していたことを裏付けするものとなりました。また、今回の調査では、古墳時代のみならず、縄文時代から弥生時代の土器・石器のほか、江戸時代以降の宅地・畑地の調査を実施できたことも、当地の土地利用変遷を考える上で、大きな成果です。詳細は、本紙でご紹介いたします。

令和八年度も調査が予定されています。調査前には、皆さまにお知らせなど申し上げる次第です。よろしくお願いいたします。

内山遺跡発掘通信

No. 1
令和8年3月号

わたしたちは
あいちの歴史を
掘り起こす
調査研究機関です。

編集・発行
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017

愛知県弥富市前ヶ須町野方8002の24

電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maijun.com>

X https://x.com/aichi_maijun

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

Instagram <https://www.instagram.com/aichimaijun/>



あいち埋文

地元説明会を実施しました。

二月二十八日（土）に、現地で調査成果を紹介する地元説明会を開催いたしました。六十二名もの方々にお越し頂くことができました。現地での説明で、遺跡の立地などの臨場感がお伝えでき、大変いい機会を頂けたものと感じております。調査はその後も続きまして、本紙では最終の調査成果を掲載しております。是非、本紙をお手にとって頂ければ、幸いに存じます。



2月28日（土）開催 地元説明会の様子

内山遺跡 消えた古墳群の調査

内山遺跡の範囲内には内山2号墳が所在し、遺跡周辺には内山1号墳・3号墳・4号墳が知られています。当地は内山古墳群の分布範囲内に当たります。令和七年度の調査区は、内山2号墳があると考えられている場所から少し離れていますが、現在の空白地にも古墳が所在していた可能性が考えられていました。古墳の中には、後世の耕作などによって墳丘などが削られて、現状ではその存在が消えてしまっているものがあるとされています（滅失古墳）。今回、このような古墳の所在を確認することができました。

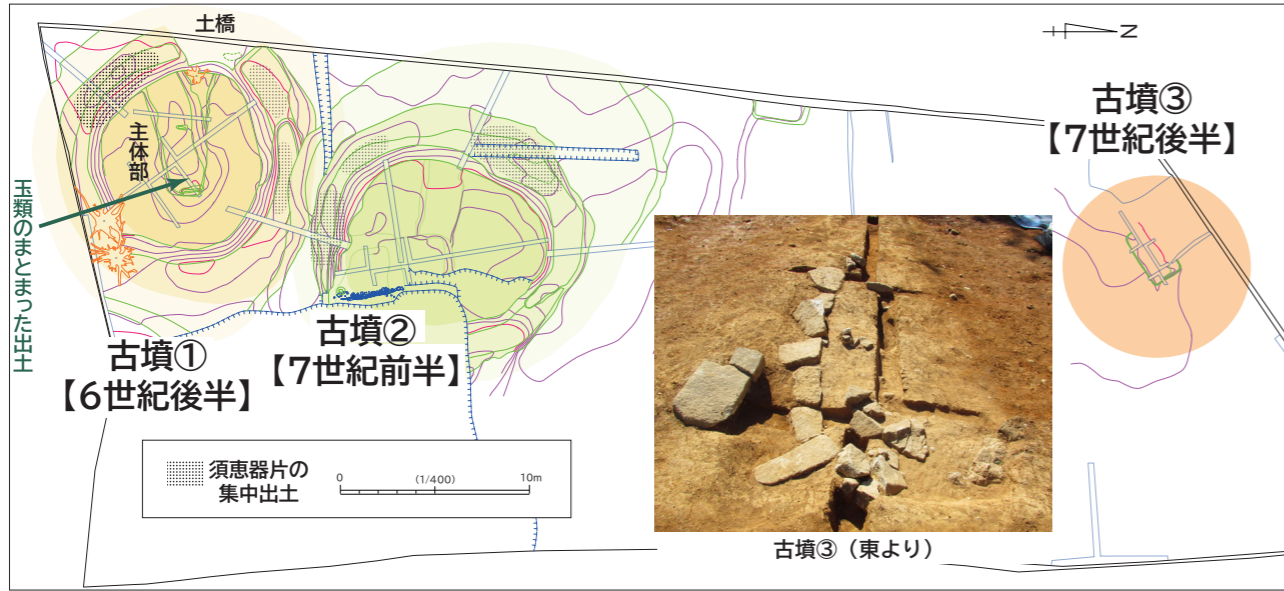
調査の結果、新たに古墳を三基確認しました。本紙では、南から古墳①、古墳②、古墳③としておきます。古墳①と古墳②は調査区南端に、古墳③は調査区北端で見つかっています。古墳①・古墳②と古墳③の間には、浅い自然の谷地形が東西方向に入っているものの、古墳①・②・③ともに調査区が位置する丘陵頂点の南北稜線（尾根）上に所在していることが分かりました。この南北方向の稜線の北には、今回は調査対象とならなかった内山2号墳が位置しています。いずれの古墳も墳丘自体は全く消失しており、確認できませんでした。

古墳①は円墳で、墳丘部分の径は九・四メートル、溝を含めた径は十五・八メートルほどです。周囲の裾および溝の中から円礫や須恵器片がまとまって出土したことから、古墳の所在が確認されたところと推定されます。礫は墳丘や裾に葺かれていたものが落ち込んだものと推定されます。

のと考えられます。溝は西側で浅くなっており、土橋があった可能性があります。古墳①では石室の痕跡を確認することができています。西側に開口していたようで、奥壁の鏡石が抜き取られた跡なども確認されました。注目すべきは、奥壁付近で石製管玉・棗玉・ガラス小玉・琥珀玉から構成される玉類がまとまって出土したことです。古墳①の年代は、出土した須恵器から六世紀後半に属するものと考えられます。

古墳②も円墳で、墳丘部分の径は十一・二メートル、溝を含めた径は十四・九メートルです。南側で古墳①と溝が重複していますが、堆積から古墳②の方が新しいものと考えられます。この古墳も裾部や溝内から須恵器片や円礫が出土しています。古墳②では、主体部の痕跡のような落ち込みをいくつか確認していますが、明確に古墳の石室によるものと確認することはできなかったため、石室の開口方向は特定することができませんでした。古墳②の年代は、出土した須恵器では六世紀後半のものも若干あるようですが、七世紀前半まで使用されていたと考えられます。

古墳③は石室のみが見つかったもので、長軸三・〇メートル、幅一・八メートルで、周囲には溝を確認することができませんでした。石室は、平面で見ると、長方形が膨れた「胴張り」となっており、壁は石積みを確認できていますが、底面には礫の配列はなく、地の花こう岩片を多く含む硬くしまった土で埋められていました。遺物の出土は確認できませんでしたが、石室の形状から、七世紀末の終末期古墳であると考えられます。（川添和暁）



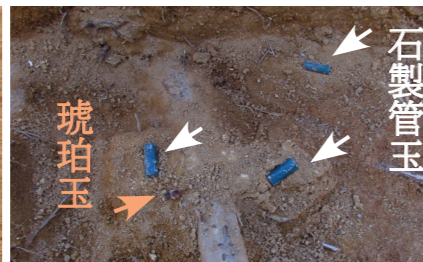
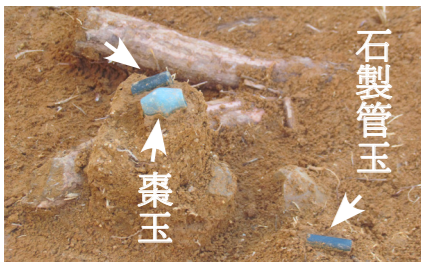
内山遺跡 古墳位置図



古墳①・古墳②（南より）



古墳① 石室の痕跡（東より）



古墳① 石室内玉類出土状況



古墳① 完削（北西より）



古墳② 完削（北より）